

『近づいているのは…』(ヘブル人への手紙 12章 14-25節) 2022.1.16.
<はじめに> この箇所には競争の描写を用いて、私たちが辿る歩みを描いています。それは、タイムレース、順位争いではなく、耐久レースのようです。走り始めた全員に、完走が期待されています。そのための伴走者からの助言とエールとして受け取らせていただきます。

I 完走を目指して(1-13)

①走り出した私たち(1-2)

私たちは、前に置かれている競争(走路)にエントリーした選手に例えられています。イエスを信じることから始まり、イエスのようになることを目指す信仰の走路です。指導者であり模範でもあるイエスに倣い、注目して、神の御前に立つことを目指して走り出しています。

②整えられるため(3-11)

一歩踏み出した私たちの現状と、目標であるイエスの姿には隔たりを感じます。うまく行かない現実には打ちひしがれるかもしれませんが、道を間違ったわけではありません。神が私たちをご自分の聖さへと、義という平安の実を結ばせるための訓練の場でもあります。

③真っ直ぐに(12-13)

私たちは自分勝手に歩んで、弱り衰えた部分に目を背けて来たのではないのでしょうか。真っ直ぐ主に信頼し、祈り求め、導いていただくことから始めましょう。主を素直に呼び求める環境に自分を常に置くことも大切です。自分中心からイエス中心に癒されるためです。

II 完走への助言(14-17)

①追い求めなさい(14)

信仰の歩みは孤独ではありません。主を仰ぐ仲間と励まし合い、協力することはもちろん、私たちが眺めている人たちも招き入れるためにも良好な人間関係を追求します。同時に、主の御前に居心地の良い関係を保ちます。やがて主の御前に立つためには当然です。

②元に戻らないように(15)

走り出した者を主が破門にすることはありません。神の恵みは絶大です。しかしそれを拒み捨てることは不可能ではありません。まどわりつく罪を放置すると、苦い根が生えて心中にはびこり悩ませ、周囲にも悪影響を与えます。不退転の表明は前進の力となります。

③すり替えないように(16-17)

目先の利得のために永遠の祝福を手放した悪例がエサウです(創世記 25:33-34)。彼は手放した祝福を取り戻すことはできませんでした(創世記 27:36-38)。賢く立ち回ったつもりが、愚かになったのです(ロマ 1:21-25)。神の愚かさは人よりも賢いのです(I コリ 1:25)。

III 完走に近づいている(18-24)

①シナイ山麓の民(18-21、出エジプト 20:18-21)

ユダヤ(ヘブル)人が神の民である自覚と誇りは、神の律法を受けたからです。シナイ山上でモーセが神から律法を受け取る間、民は山麓で待っていました。20節の禁止命令(出 19:20)から、神から直接語り掛けを受けることを恐れ、仲保者モーセを求めました。

②近づくとゴール(22-24)

私たちの走路の先には、ゴールが見えているのでしょうか。神の御住まいである天上のエルサレムには、無数の御使いと神の嗣業を受け継ぐ聖徒たちが喜び集い、すべてを公正にさばかれる神と、その御前に立つ仲保者イエスが、私たちの到着を待っています。

③神と語らう民として

神の御声を聞き、御心を知ることは、難しいこと、恐れ多いことでしょうか。救い主イエスによる新しい契約で、私たちは神と顔と顔を合わせ、直接語らうことができるようになりました。モーセの時代の民のように、恐れおののいて退いてはなりません。

<おわりに> 私たちの信仰の歩みには、苦しいこと、辛いこともあります。その中で、主イエスの御声を聞き、語らいながら進むのです。やがて顔と顔を合わせて、直接語らい、主の御顔の笑みを仰ぎ見るその時が、確実に近づいています。(H.M.)